

## 一 蓮托生 鉄の棺桶・潜水艦

石川県 武部 敏克

大正十四（一九二五）年三月、私は富山県に生まれましたが、当時は既に大東亜戦争が始まり、緒戦の戦果、特に海軍のハワイ攻撃、マレー沖での英国の誇る新鋭戦艦プリンス・オブ・ウェールズと、同じ戦艦レパルスを撃沈。このような時代でしたので、我々若者の多くは徴兵を待たずに海軍に志願しました。

昭和十七（一九四二）年五月、私は舞鶴海兵団に入団できました。海兵団の教育は聞きしに勝る厳しいものでした。これにより強健な体力と、強固な精神力が養成されたのでした。海軍は個人個人が命令により艦船に乗り組み、あるいは陸上勤務に、さらには学校に入学するなど、それぞれが海軍軍人として、それぞれの勤務をするのです。

私も、そのようにして海防艦「石垣」に乗艦を命ぜ

られ、青森県の大湊港で乗り組みましたが、「石垣」は第五艦隊に属していましたので、初陣はアリユージュン方面の攻略作戦でしたから、凍りつく北海で実戦により教育を受けたのです。この間、立派な上官に恵まれ、その後の私の海軍軍人としての資質を磨いてくれたのです。

昭和十八年三月、海軍工機学校入校、機関科電気熟練生として教育を受けました。卒業後、今度は、潜水艦乗組員になるべく海軍潜水学校に入校。寒中の朝、上半身裸体での体操などで、だんだん海軍軍人らしく鍛え上げられ、座学と実習においても優秀な教官、助教に恵まれ、専門的な技術集団の仲間入りすることが出来ました。

潜水艦も割と適性が必要で、少数ではありますけれども技術屋の集団であると言えます。そのためか、海軍はいじめではありませんが、要するに責任を重んじることを厳しく叩き込まれます。一人でも間違いを起こすとそれで全てが終わりになってしまふ。一人であっても全体の生死を決する、全体責任でもある訳で

す。そのため責任感が人一倍強い人が養成されたように思えます。特に学校教育には「赤本」というのがあり、この赤本は潜水艦のみしかありませんで、要するに専攻の④の教科書でした。

私の潜水艦での実戦の体験をお話しますので、その前に、潜水艦の特質な行動についてお話しします。まず「潜伏」「鎮座」という言葉についてですが、「潜伏」は潜水艦の浮力をゼロにしてジーンと構えることです。そうしてジーンと動きもせず静止して上下浮力をゼロと、水圧と自分の重さをかけてゼロということ。「潜伏する」と言うのです。「鎮座」というのは浅い海底ですと「鎮座します」と言って、海底に沈座して上の艦船の通過するのを待つということ、このような特質ある行動もあります。

とくに水圧は水深一〇メートルで一キログラムがかかるものですから一〇〇メートルで一〇キロ、二〇〇メートルで二〇キロとなります。

また日常会話には「ベント開け」などがあります。が、ベント弁という弁があり、これが潜航するときに

油圧で「ベント開け、急速潜航」、この号令で、油圧によってベント弁が開く、従ってスピードと艦の重さとそして前部が下がることによって海水がタンクに入る。これによって一〇秒余りで海中に没するという事です。

このようにして、潜水艦は隠密に行動するので、艦内の声は全部水上の艦船に聞こえますので、手先信号が多く、これを交えた日常会話が行われませんでした。まあ、今テレビで放映されている手話と同じようなものです。

科学的要素としましては酸素欠乏、気圧、ビルジ（汚水）が溜まりますので、中の気圧が圧縮されると気圧が変わり、温度が上がり湿度が上がります。こういうことで空気清浄が当たり前のように日常行われていました。とくに海水を電気分解するとガスが出ます。これを吸えば「いちころ」ということでした。

従ってこれらの苛酷な生活を、我々は長い間していたわけですから、海軍においては潜水艦乗りは給与が一番良かったわけです。煙草にしても高級なものが支

給されました。また、水がないものですから当時でも歯磨きにはチューインガムということになります。しかし作戦行動をすれば缶詰しかありませんでした。

また、海軍は転勤が非常に多いので、艦から艦へ移動するときには夜行は不可、一度は宿に泊まれということ、案外この点では余裕をもたせてくれました。

次に、私の体験中の実戦についてお話しをしてみましたと思います。私どもは常に「一蓮托生」という言葉が頭にあるわけです。水上艦船でも、自分の艦が沈む時は自分の体を艦に結んで一緒に沈むという過去の例があります、その後は、やはり人材が惜しい、そうして優秀な人を失うことはいけないということ、出来るだけ水上艦船では艦長も下士官、兵と共に脱出（退艦）ということになったようです。

しかし、潜水艦の場合は勿論文字通りの「一蓮托生」で、そんなことを言っておられません。それで、とくに私たちは意識して潜水艦を「鉄の棺桶」と言っておりましたし、確かに「海底地獄」ということで

す。

当時「呂60号潜」から「呂69号潜」までは佐世保籍の艦でしたが、「呂67号潜」が舞鶴鎮守府に移管されて、その引き取り要員ということで、少し長く乗っていたのですが、これがたまたま昭和二十年三月二十四日、ちょうど呉の第4ドック（戦艦「大和」を建造したドック）に潜水艦六―八隻とで修理に入った時、初めての呉空襲で、警戒警報が出て、昼食後、電信から「五〇〇」ほど来るぞ、五分後呉の上空だ」ということで情報が入りました。

私は、たまたま兵科でありませんでした。「それぞれ退避せよ」ということになり退避しました。私は退避先が悪かったのです。五〇―一〇〇機が蠅の一群が来るようで、痛い目に遭わないからこれを見ているわけですが、そのうちにあちこちの艦船からバリバリと撃つ、「大和」もいたと思います。大きな音もしております、落ちる時敵機は、ピラピラと反転しつつ落ちるのが沢山見えました。

たまたま私のいる第四ドックの上にグラマンが来

て、その時に瞬間ですが敵機の影が映ったもので私は身を低くしました。結果的にそれで生き残ったのですが、小型爆弾が五、六発落ちました。その時の爆弾の破片の飛び方というのは、後で分かったのですが、玉突きのようにパーッと跳ねたものがさらに跳ね返って、その跳ね返ったものが五、六発こちらにも飛んで来るというように、私の場合は機能障害ではないのですが、肋骨から胸膜・心臓の真上まで、もう一センチ深ければ心臓をぶち抜いているという、心臓の手前で止まっていたのです。

黒色火薬ですからもう世の中は真っ暗闇です。その時の心境は何と言ってよいか、たまたま後ろに「人」「ウーン」と言ったものがいたので見返りましたら、胸から肺が飛び出しており、私は右手でそれを押し込んでやっているような感じだったのですが、その時、私は尻もちをついており、「おかしいな、何か左の手が動かないな」と思いましたら、カマイタチというもので、サーッと切れても血も何も出ず、ただし手は動かない。それで、よく見たら被弾していました。「し

まったな、つまりぬことでグラマンにやられたな」と、瞬間的に思いましたが、死ぬとか何とかは感じず、グラマンは艦載機だから「この辺に五分も一〇分もおらんと、全部早く帰ってくれ」と、こういう感じで、動かずにいたように記憶しています。

この空襲で非常に大きな被害を被ったわけですが、とにかく、ボーツと黒色火薬が広がり、それが消えて明るくなってくると、もう腕やら顎やら頭やら、そして破片やらいっぱいあるのです。今まで同僚は十四人がいたのですが、その方々のバラバラのものが目の前にあるということで、その時は「でかい損害だなあ」と思ったのです。私は、グラマンが帰った後、担架で運ばれて海軍病院へ入りました。

海軍病院といっても学校の体育館のような所で、そこに死亡者がずーっと並べてある訳です。私もここに並べられたのですが、二回目か三回目の検死の時に「おい、こいつは生きとるぞ、あっちへ持って行け」ということで、私は生きている組へ入れられ、今日があるというわけです。

私は二度死線をさ迷いまして、二度あることは三度あると中しますが、早く三度目が来ないかと思いましたが、この負傷でも死なずに済みました。

潜水艦の中になると、一番空気が欲しくなり、空気に味があるということ、私は常に感じておりました。今は森林浴などで、空気に味があることはご存知と思いますが、我々はそれ以上に空気の美味しさというより有り難さをつくづく体験しております。

私は、この「呂67号潜」の時に負傷し、沢山の方々を戦没させ残念でたまりませんでした。あの当時は「グラマン！ このやろう」と思っております。潜水艦乗りと飛行機乗りとは消耗品というように感じたもので、「お前！ 潜水艦乗りでよく生き残ったな」と嫌味でなく言われますが、負傷したが生き残ったということでご勘弁を願っております。

潜水艦は電探によって探られ爆雷を受けます。艦砲射撃を受けることもあります。これは急速潜航（約

一〇秒余り）することによって避け、潜航してジューツとしています。しかし、潜航していたが捉まり爆雷を5、6発受けたこともあります。陸戦で、腹をやられると駄目で、苦しんで死んでしまうとやられています。頭の上から爆雷を受けても、下へは水圧が高いから平気です。爆雷の衝撃は横と上しか行かないからです。

横からの爆雷は実際に受けた者でないと分かりませんが、そこらの木に雷が落ちたのとは全く違い、びつくりどころか、これは地獄の終わりかと、そういうほどの音で、気が狂うような大きな爆発音です。

第二発目の時にまともに食らったよう、とにかく艦内の電気は全部消え、後ろに予備灯がついているだけ。本気に全員が幽霊のような顔だと思えました。そして艦内のいろいろの塗料が全部剥げ、その剥けた塗料が粉になって艦内は真っ白になりました。昔、潜水艦乗りは結核患者が多かったと言いますが、戦後においても、傷痍軍人でも結核患者は、亡くなれば公務死としていなのです。

何しろ頭の上で大きなものが炸裂するので失神もしますし、艦内は酸欠でもありますから、やはり人間は酸欠というものには抵抗力がありませんので、ギリギリの極限の体験はそうありませんが、本当にあった場合は、海軍の場合、みな沈んで亡くなっています。生き残っているということは、本当にはないのです。このような状況は水測・聴音機係が記録していたということです。

また、攻撃を受け、被害を受けた艦内で苦しくなれば「殺してくれ」とか、潜水艦の内側では実際に多くあることです。私も体験上は死ぬということは三回、あの世に行きそうになりましたけれども、やはり呼び戻すというには必要ではないかと思えます。三途の川を渡って行こうと思っても「誰かが呼んでいるから還ってきた」という気がしてならないのです。

なお、海軍の言葉で、会社などで使用されている言葉として「五分前」という言葉があります。本当にいい言葉でして、五分間あれば準備でも何でもすること出来ます。ですから何事をするにも「五分前」とい

うのは、私の永年の会社にいた時の社員指導の言葉でもありました。

それからもう一つ「責任」ということで、この「責任」さえきちんとやれば他人は認めてくれると、勿論口先だけでなしに、やらねばならないということだと思います。私が海軍で学んだことはそういうことだったと思います。そして「人間関係さえうまくゆけば、人間の運命も変わる」ということも海軍で学んだと思います。

## ボルネオ島縦断戦記

秋田県 田村 弘

秋田県生まれの私が、鹿児島島の海軍航空隊に入った。三カ月半の教育は私は覚悟していたためかあまり厳しいとは思わなかったが、秋田弁だから言葉で苦労をした。「お前は何を言っているのか」と言われる。特に鹿児島の人には通じないのだろう。それと同じ